

長かった冬も終わり、桜の咲く季節となりました。4月より新しく新入社員を迎えられた企業も多いのではないのでしょうか。近年では、少子化に伴い採用市場では依然として売り手市場が継続しています。それにより、各社は学生の獲得にあれこれアイデアを絞り出し、人材確保に苦慮していると聞きます。特に中小企業にとって、学生を選ぶ時代から選ばれる採用戦国時代となりつつあります。

当社でも8年ほど前から毎年、新卒向けとして、営業職を中心に幅広い業種で募集を行っています。募集をするだけでは学生は集まりませんので、採用イベントへの参加や開催、県内高校との連携などアピールを続けていきます。このようなアピールが功を奏し、徐々に高知県内では「知ってる!」という学生も増えてきました。大変うれしく思います。人口が減少しつつある高知県ですが、高知県で就職しよう!と思ってくれる学生が増えるように魅力ある企業づくりに邁進して参ります。

当社の取り組み

当社では社員が共通の価値観を持つことを目的に社内木鶏会という勉強会を取り入れています。月に一回、全社員が集まり雑誌『致知』に関する感想文を発表します。その社内木鶏会の全国大会へなんと!当社が四国ブロック代表に選出されました。

今年6月に開催される全国大会に向けて社長を含めた24名が一丸となって日々練習に取り組んでいます。大会は各地区の代表4社と競い合い、観客の投票により感動大賞が決定します。今年で第12回目の開催となりますが、四国地区の優勝は未だありません。有終の美を飾れるように井上魂を見せるぜよ!

がんばるぞー!

オー!!!



井上通信

No.14

井上のお石灰な話

土佐石灰の歴史 編

「ドイツ、イタリア、フランスなど5か国にはこんな良質の石灰石はどこにもない。私の知っている範囲では世界一である。」と、工学博士 越智圭一郎氏に言わしめた土佐石灰は、1730年(享保15年)に本格的な製造が始まることとなります。美濃屋忠左衛門と大和屋三右衛門の2名で始めた土佐石灰製造は、上方で好評を得たことで、同業者が次々誕生し一大産業に発展していきました。その後、美濃屋と大和屋対新興同業者による上方への出荷の差し止めをめぐるイザコザがありましたが、新興同業者が美濃屋と大和屋へ手数料を支払うことで決着しました。こうした問題を乗り越えて石灰は、本格的に土佐の国産品として、上方市場に現れることとなったのです。

「やまった」
土佐の方言紹介

やってしまった、止まる、の意。
「やまった!忘れちゃった!」(しまった!忘れてた)のように失敗した時など大げさに表現する際に使われます。一方で雨が止むなどの止まるという意味では「雨やまった?」(雨が降り止んだ?)のように使われます。このように土佐弁には複数の意味がある言葉もあるのでやっかいですね。

やまった!
寝くせのまま出てきたらや!



高知県内で作り出された優れた地場産品や地場産業振興に貢献のあった活動を顕彰する「第38回高知県地場産業大賞」で「山北みかんワイン」が地場産業賞を受賞することが出来ました。県内の耕作放棄地や高齢離農の問題解決に取り組み地域団体からミカンを仕入れ、産地の維持に貢献するだけでなく、地域にこだわったストーリー性のある取り組みであることや山北みかん農家の収入増加に貢献している点を評価いただきました。

ワインの味の9割は原料由来と言われます。高知の美味しい「山北みかん」が原料だからこそ、受賞する事ができました。山北みかんの栽培に関わる方々のご努力であることは間違いありません。



井上ワイナリー だより